

ユニークな  
地質系博物館  
(22)

# 足寄動物化石博物館 フォストリーあしよろ

澤村 寛<sup>1)</sup>・村石 靖<sup>1)</sup>

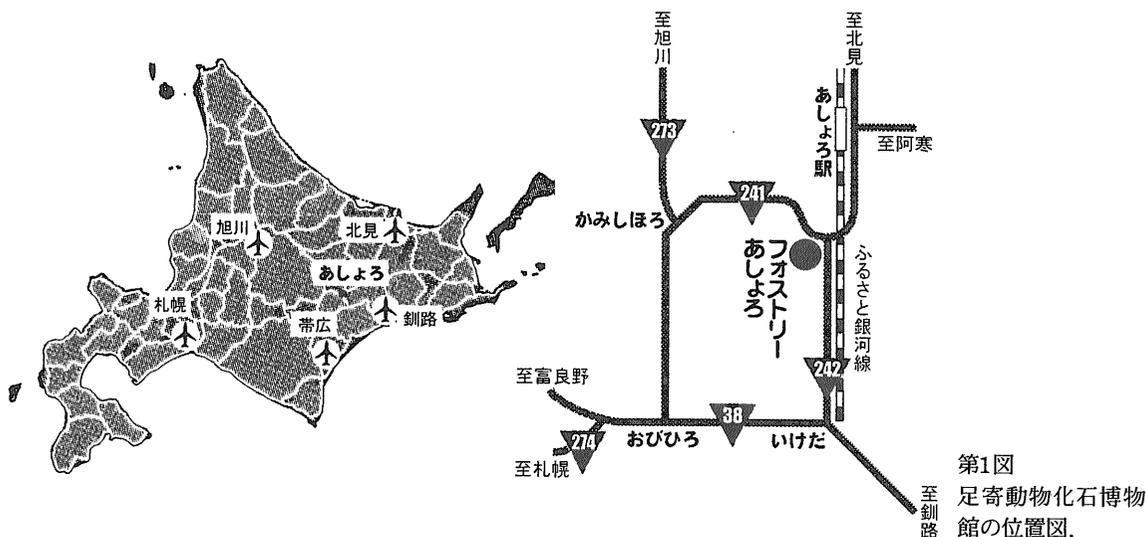
日本一広い面積をもった町、足寄町は北海道のほぼ中央部、帯広市の北東部に位置します(第1図)。この足寄を含めた白糠丘陵周辺が隠れた地質の名所であることは、専門家の間では良く知られています。平成10年7月1日、この足寄町に「化石の博物館」としては、道内で4番目の「足寄動物化石博物館-フォストリーあしよろ」が開館しました。以下に、本館の展示や特色をご紹介します。

## 1. 博物館ができるまでの経緯

1976年、当時北海道大学の大学院に在籍されていた木村 学さん(現、東京大学教授)が、足寄東部の茂螺湾川流域の地質調査中に、偶然哺乳類の化石を河床で発見しました。この化石を産出した化石包含層は、川上層群中部の茂螺湾層です。そ

して木村さんの指導教官であった松井 愈さんを中心に、北海道大学の大学院生ならびに十勝団研のメンバーが参加して大規模な発掘調査が行われました。この発掘調査は、まず北海道新聞で大きく取り上げられ、おおぜいのマスコミ関係者が足寄町を訪れ、地元でもたいへんな話題になりました。

その後の地質や古生物学的研究の発展によって、茂螺湾層は上部漸新統、すなわち今から約2,700万年前の地層であり、産出した化石は原始的な束柱類(デスマスチルスやパレオパラドキシアの仲間)であることが判明いたしました。さらに、発掘現場近くの住民が第二の束柱類化石をはじめ次々と化石を発見したことから、1984年に足寄町教育委員会では「化石作業所」を設けて、松井さん、木村方一さん(北海道教育大学)、犬塚則久さん(東京大学)らの指導・援助を受け、クリーニングや復



1) 足寄動物化石博物館:  
〒089-3727 北海道足寄郡足寄町郊南1丁目  
Tel. 01562-5-9100

キーワード: 北海道, 漸新世, 足寄動物化石群, 束柱類, 鯨類, 博物館

元の作業を行うようになりました。現時点で、この地域から収集された化石は、束柱類3標本、ならびに鯨類18標本に上ります。

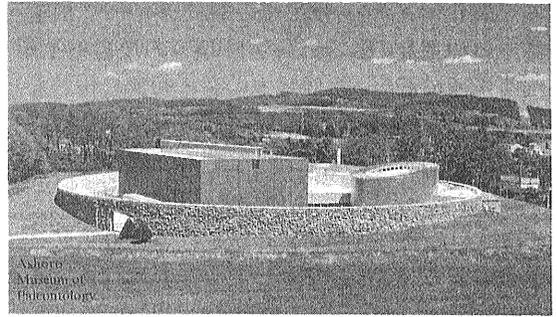
足寄町の博物館計画は、「ふるさと創生事業」をきっかけに具体化し、1990年から、基本構想をまとめ、設計を行い、建築や展示の工事を進めて、1998年7月1日に一般公開をはじめました。正式名称は「足寄動物化石博物館」、一般公募による愛称は「フォストリーあしよろ」です。「フォストリー-fostory」とは、化石fossilと歴史historyをくっつけた造語ですが、それに、子どもを育てるfosterと～の場所-oryを追加して、「化石を基に歴史と子どもを育てる場所」として使うことになりました。博物館テーマは、総合的(≒特色がない)なものを避け、化石、それも地元から産出した海生哺乳類を主体に設定いたしました(第2図)。

## 2. 展示の概要

足寄動物化石博物館の展示は、現在4部構成になっています。

第一部は、「足寄動物化石群」と名付けられた標本群や産出地域の地質解説などを展示し、全体の導入としています。

第二部は本館の目玉でもある「束柱類」の展示です。まず、束柱目の代表タクサでありもっとも特殊化したデスマスチルスについて、形態の特殊性や古生態を解説しています。ここでは、3人の研究者が復元した気屯標本3体(長尾復元・亀井復元・犬塚復元)により科学的な展示を試み、歌登標本に

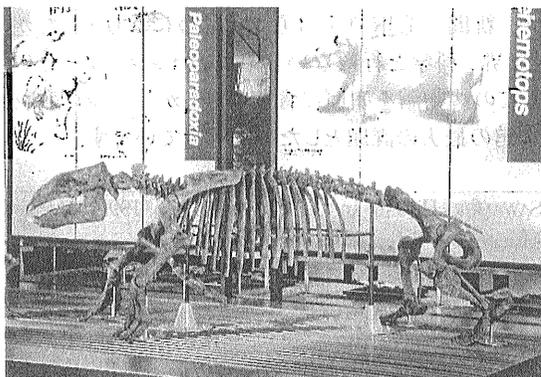


第2図 足寄動物化石博物館外観。

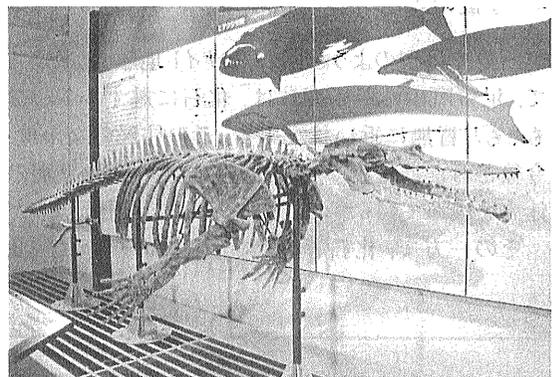
よって「科学的復元」に到達したことを示します。さらに、足寄町民がみつけたベヘモトプスを含む3体のパレオパラドキシア科骨格を展示し、束柱類の進化や足寄標本の意義を述べつつ、全体としては「謎の海岸生活者」束柱類の不思議をあらわしています(第3図)。

第三部は、クジラを中心に海生哺乳類の進化や生態を展示します。鯨類では、クジラの祖先＝メソニクス類生体復元、原鯨類プロゼウグロドン(バシロサウルス)の頭蓋、足寄産の「*Aetiocetus polydentatus* カズハヒゲクジラ」復元骨格、*Aetiocetidae*の頭蓋レプリカを使った「系統図」、6頭の現生鯨類骨格など。鱈脚類では、厚内層群から産出したアロデスマス(中新世の鱈脚類)全身骨格(まだ母岩に入ったままですが)、トド骨格が展示物の主体です(第4図)。

第四部は、足寄町内・周辺にみられる地質・化石資料を用いた地史の展示です。地質調査所の三田直樹さんの研究でおなじみのオンネトー湯の滝



第3図 足寄町茂螺湾産出ベヘモトプス復元骨格。



第4図 函のあるヒゲクジラ: カズハヒゲクジラ。

の二酸化マンガン、常呂帯の層状チャート、根室層群中の白亜紀/第三紀(K/T)境界の黒色粘土層、釧路炭田の石炭、十勝地方の脊椎動物の化石などにより、地球と生命の歴史に迫ります。

解説パネルは従来のような半永久的な造作をやめ、パソコンでつくったイラストや文を大型プリンターから打ち出してパネルに張り付ける方式に、展示台は可動式にし、更新・変更を容易に行えるようにしました。

### 3. 作業も公開

本館では、展示室に隣接して作業場「化石工房フォストリー」を配置しました。展示を見終わった来館者を工房に導入し、そこで職員と対話できるようにしました。幸い、「化石作業所」時代からのスタッフ数名が、クリーニングやレプリカづくりに取り組める体制ができました。

人が動くことによって骨格中心の静的な展示を補い、あわせて古生物学の実際の姿・博物館の「裏側」を知ってもらおうというねらいです。「本物」の化石にさわって感激する親子づれがあったり、アンモナイト愛好家とクリーニングや発見のコツなどの化石談義に花を咲かせたり、職員側も楽しい時間をもつことができます。

工房の一角に40人程度の体験学習の施設をもうけており、化石のクリーニング体験やレプリカづくりを楽しむことができます。学校の理科や総合学習の利用も増えてきました(第5図)。

### 4. 今後の課題

三笠や穂別のような「アンモナイト地域」とは違って、足寄町の住民の間には、化石に対する関心はもともと皆無に近い状況です。この住民のなかに、今後どれだけ化石に対する興味や博物館の活用の仕方を広めていくかが、第一の課題でしょう。

その一方で、化石専門という間口の狭い博物館



第5図 化石工房での化石クリーニング体験。

ですから、来館者の対象はできるだけ広げなければなりません。道東の観光地への「入り口」という地の利を生かして、できるだけ多くの入館者を獲得することも、今後の博物館の活動を円滑にすすめる条件づくりのひとつだと思います。

さらに小中高の教育活動と連携することは、地方の公立博物館としての使命にとどまらず、地球科学を広く普及する点で、たいへん重要であると考えています。

それらの基礎になるのは、地元にも根ざした地道な創造活動です。「中央」から最も遠い場所にある博物館ですが、幸い足寄町内にはまだまだ化石が埋もれていますし、道東地域の脊椎動物化石も、本館に集まるようになってきました。現在、増える試料に対し人力が追いつかないという問題も生じつつありますが、各分野の研究者の援助をうけながら、今後も地域に根ざした活動を進めていく方針です。

バブル期に計画された各種博物館施設の問題が、新聞でも取り上げられるようになりましたが、“学界、科学と行政ないし国民のインターフェイスとしての博物館を如何に育てていくか?”この実践を本館の最大の課題としたいと考えています。

SAWAMURA Hiroshi and MURAISHI Yasushi (1999) : Ashoro Museum of Paleontology : fostory Ashoro.

<受付: 1999年7月15日>